

やまざと



順尾山から望む大門山・見越山・高三郎山 (by N. Toga)

金沢大学ワンダーフォーゲル部 OB 会会報 vol. 24

## 目 次

【トピックス】			
白山でライチョウ発見！	15期	上馬 康生	1
【OB会活動便り】			
近畿支部活動報告	11期	加藤 忠好	4
関東支部懇親会	9期	山中 重夫	8
野沢スキー（2009 スキー日記）	9期	保田 敦	9
南竜集中PW2009	8期	山村 嘉一	12
【投稿ページ】			
2009KOBE 六甲全山縦走大会に参加して	4期	佐藤 秀紀	16
富士(?)登山	9期	吉田 洋次郎	19
南ア・三伏峠から	6期	合津 尚	20
地を這うワンダラー	20期	松下 和隆	21
白神・八甲田・奥入瀬・十和田の旅	8期	篠島 益夫	25
いまごろ百名山	15期	舟田 節子	33
23期同期会	23期	名倉 均	36
【現役のページ】			
2009年度活動報告	52期	山形 和弥	40
会計報告			42
事務局から			43

## 表紙の言葉（梅典雅）

建築から10年を経て老朽化したベルクハイムを建て替えたのが1974（昭和49）年の夏、林正一さん率いる「山岳会グループ・ナカオ」が創立10周年の記念誌『なにかお・犀奥特集号』を発刊したのが、その前年の3月。

今から想えば、まさに「犀奥華やかかりし頃」だった。新トレは、もちろん高三郎。倉谷川遡行や犀滝、白山～ベルクハイムなどの多彩なPW。ブッシュをこぎ、国有林界の標柱を探して赤ペンキを塗る営林署のバイトもあった。そして、小屋作業と称する登山道整備により、高三郎から見越、さらに大門から奈良岳・奥三方までの「犀奥T字回廊」をつないだのが、ぼくたちワングルだった。

その後、県境稜線は、白山国立公園の「北山稜線」として、富山県がなんとか整備をしているものの、高三郎から見越の間は廃道。今では、高三郎の登山道さえ危うい状況である。

犀奥の山々には、昔日のワンダラーたちの足跡が刻み込まれている。

# 「白山でライチョウ発見！」

今年、我が金大ワングルのホームグラウンド白山で、“ライチョウ発見”のビッグニュースがありました。登山者からの通報をきっかけとして石川県自然保護センターが確認に向い、間違いなくライチョウであることが確認されました。そこで、その時実際に確認に向かった石川県自然保護センター職員である 15 期の上馬さんにやまざと用にコメントをもらいました。

平成 21 年 6 月 6 日の  
北國新聞 朝刊の一面記事

北 國 新 聞 2009年(平成21年)6月6日(土曜日) 第4

## 豊かな自然 裏付け

# 白山にライチョウ

### 雌1羽 66年ぶり日撃



白山麓で国の特別天然記念物「ライチョウ」が66年ぶりに目撃されたことが、分かった。確認されたのは成鳥の雌1羽で、北アルプスから比較的低い山を這って移動して来たと考えられる。「野鳥の楽園」もある白山の豊かな自然環境が維持されていくことが、裏付けに形で、環境省・石川県自然保護センターの取組を進め、生態系保護の柱として定めている。

#### 北アルプスから移動？

環境省が発表  
「世界環境デー」5月5日  
日探検隊が確認した  
白山山頂の南麓セマ  
ーリ(約2500m)で、  
男性登山者から5月  
26日にライチョウの  
うな野鳥目撃した  
との情報を受けられ  
た。同センターの上  
層生次長(67)が、  
午前5時半から調  
査し、約6時間後、  
長約40分のほぼ夏  
のライチョウを  
発見。カ  
マに収めた。雌1  
羽。白山種物のガ  
ンゴ、  
シロトゲモミの芽  
葉を食べて、30分  
後に立ち去った。  
ライチョウは現在  
白山種物及び目撃され  
たライチョウ(石川県自然保  
護センター提供)

「水田期の遺跡」といわれ、日本では生息が途絶した。ライチョウは北アルプスから世界最南に生息する。1955年に国の特別天然記念物として指定された。環境省が絶滅の恐れがある野生動物の絶滅を防止するための種別として指定されている。

近年の登山ルートが約500メートル、ライチョウが直撃される。ライチョウは、冬期に1500メートル前後の山岳に移動しながら、ライチョウは約4000メートル以上の生息域を有する。白山山頂(2569メートル)に近い生息域は立山連峰の山頂に位置する北アルプス(標高3000メートル)の一部に生息域が広がっている。最大移動距離は約500メートルと推定されている。

「白山にライチョウ」が、白山に飛来したことで、県民が環境保全の意識を高め、自然環境の保護に力を入れていくことが期待されている。

上馬さんが実際に撮った写真  
(2009.6.2 撮影)



## 白山で約 70 年ぶりに ライチョウ発見

15 期 上馬 康生

登山経験の豊富なワンゲルOBの皆さんにとっては、ライチョウはよく知られた鳥のことでしょう。しかし、白山では見たことはないと思います。もし、見たことがあるという方がおられたら、ぜひ連絡をお願いします。

そのライチョウを、2009年5月26日に登山者が白山で発見し、写真が私のところへ届きました。白山の生き物のことでは、近年にない驚くべきできごとで少し興奮しました。その日のうちに本人と連絡が取れ、間違いのない情報と判断して、翌朝早く調査に登りました。そして、幸運にも発見現場の近くで、ガンコウランやコケモモを採食中の雌のライチョウを確認し、写真とビデオにより撮影することができました。

白山のライチョウについては、古くは鎌倉時代に後鳥羽院の「しらやまの松の木陰にかくろいてやすらにすめるらいの鳥かな」の歌があり、また江戸時代の白山の幾つかの紀行文に目撃情報の記載があるなど、全国によく知られた存在だったようです。しかし、どの程度の数がいたかは不明で、その後、明治から昭和の初めにかけての博物学者の調査等では、極めて稀にしか生息していないことになっています。

1976年発行の石川県白山自然保護センター研究報告書で、当時の動物担当であった花井正光氏と県立高等学校教諭の徳本洋氏が白山のライチョウについて述べています。その要約は以下ようになります。

白山の文献にあるライチョウの観察や

捕獲事例は、江戸時代と明治時代にあるが、その後はない。聞き込み調査で、大正年間と1930年代までの間に目撃例はあるが、その後はない。ライチョウの剥製は石川県内に17体、福井県に3体、山階鳥類研究所に56体あったが、白山での拾得とされる1体を除いて、白山での捕獲が確実なものはなかった。以上のことから大正年間から1930年代にかけて、ライチョウが絶滅への経過をたどったと推定。絶滅の主原因としては、白山の高山帯の狭い面積と独立峰であることが考えられるが、より直接的な要因は不明。北アルプス方面から中間に位置する山地を経て白山へ移入する個体が時々あったのではないかと仮定。なお、この研究は、1975年に環境庁がライチョウの白山への移殖が検討され、委員として信州大学羽田健三教授、大町山岳博物館平林国男館長などが現地調査にも参加したことがきっかけとなっています。

当時、大学院生であった私も金沢で開催されたライチョウのシンポジウムを聞きに行ったことを覚えており、研究テーマとして白山山系の鳥類全般をみていたので、何度かライチョウを探しに一人で登ったものです。この鳥の生態からして、縄張り形成期には雄が稜線沿いの目立つところにいると考えられることから、3月下旬から6月にかけての雪の白山の方々の尾根筋を中心に調べました。登山道のない、たとえば別山の東尾根や大汝峰の東尾根など、普段は人の行かないところへも行きました。その時の結論としては、白山にはライチョウは生息していないということでした。その後も毎年何度か動物の調査等で白山を幅広く歩きましたが、一度も出会うことはありませんでした。

今回見つかったライチョウは、いったいどこから、いつ来たのか、と多くの人に関心をもたれたことでしょう。

日本におけるライチョウの生息地は、南・北アルプス、乗鞍岳、御嶽山、火打山の高山帯です。これらのどこかの山岳から飛来したと考えるのが妥当と考えられます。一度に長距離を飛べとは思えない鳥なので、途中の山で休み休み、無事たどり着いたと思われます。時期としては、分散期と考えられる秋以降です。雪が積もると、真っ白な冬毛で天敵から見づらく、低木の茂みに隠れながら移動してきたのではないかと考えています。

これからの観察次第では、白山でのライチョウの新たな食べ物や生息環境も明らかになることでしょう。羽毛や糞が採取できれば、DNA 鑑定を行うことで、どこから来たか分かる可能性もあります。

今後、白山と北アルプスなどとの間で、ライチョウが発見される可能性があります。もしかしたら、約 70 年の間を埋めるライチョウの確実な記録が出てくるかも知れません。

原稿提出後に 2 度、秋羽のライチョウと冬羽に変わりつつあるライチョウを確認してきました。映像などは石川県白山自然保護センターのホームページで公開されています。

(<http://www.pref.ishikawa.jp/hakusan/raicyou/index.htm>)

とにかく、この機会にライチョウの白山の現地での再確認と過去を目撃情報の収集による新たな生息状況の把握に努めたいと考えています。白山での目撃情報があれば、ぜひ連絡していただくことを皆さんにもう一度お願いします。



ガンコウランをついばむライチョウ

## OB会活動便り

【近畿支部活動報告】～支部設立5周年！～

KUWVOB会近畿支部は、2004年1月に関西方面在住のOB方々を中心にOB会最初の支部として活動を開始しました。以降年10回程度のPWなど毎年精力的な活動を続け、今年5周年を迎えました。“金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会近畿支部”として独自のホームページ(<http://www.actv.zaq.ne.jp/kuwv/index.htm>)もありますので皆さん見られてみてはいかがでしょうか。

やまざとでは2009年に行われた活動についてホームページなどから抜粋して一部を紹介したいと思います。

- 奈良・春日山と原生林PW(H21.2.1)
- 奈良・二上山PW(H21.2.21)
- 丹波・金山PW(H21.3.7)
- 春爛漫の湖南アルプスPW(H21.4.11)

湖南アルプス縦走(大津・栗東市境) 2009.4.11 天候晴

JR草津駅集合 9:30 9:35 タクシー4台に分乗し、金勝寺に向かう

10:20 金勝寺(こんしょうじ)

10:30 金勝寺より馬頭観音堂へ出発

11:20 竜王山頂上。観音堂より登山道へ

11:30 岩場の尾根展望が始まる

11:45 耳岩。此处で、休憩昼食、メニューは伊豫さん心づくしのスープに始まり、沢山の差し入れを食し、最後は森川師匠のお点前で山上では贅沢な抹茶を頂く。皆さん差し入れが多く、減量中の私には全部のお付き合いは無理。大中小は参加したいし、食べる食べないで、個人的にはストレスが多かった。しかし、岩場の展望は楽しく、付近のいろんな岩を登って愉しむ。6日に歩いた播磨アルプスよりも更に立体的なコースであるが、みつばつつじなど花には恵まれていなかった

13:30 長時間休憩であったが漸く出発

13:55 天狗岩。此处は今日一の展望と楽しい岩場。昨年6月の屋久島縦走を思わせる岩場の形が多い。ただ岩は茶系、白系色で屋久島ではグレーまたは黒色であるところが御影主体の岩場でも違うところ。

14:15 此处は写真タイムで時間を過ごし、出発。

この先は金鶏山をパスして落ヶ滝への下山路にはいる。その手前まではずっと尾根上の展望が続き、ゆるい下り道が続くが、分岐からは谷筋に入り、途中の岩場下りを何箇所か繰り返しながら下り、落ヶ滝分岐から落ヶ滝へ至る。落ヶ滝はなかなか奇観の滝で水量は目立たないが、面白い形の滝。

16:50 上桐生駐車場

16:55 オランダ堰堤

17:25 上桐生バス停

18:00 草津駅前（東口）解散

参加者 5期 金岩、6期 小川、8期 伊豫、篠島、  
10期 藤井、伊豫敦子、  
11期 畔山、加藤夫妻、森川、12期 野村、  
15期 宇野夫妻、間所夫妻、金井  
合計 16名（過去最大クラスの参加）



### 霊仙山・御池岳 花の旅PW（H21.5.16～17）



滋賀・赤坂山と社寺巡りPW (H21.6.6~7)

6日、7日のKUWV - OB会6月イベントは参加5名で無事終了しました。参加は少ないながらも、花の赤坂山、小川ロッジの竹の子やお肉にも恵まれて、楽しいウォークとパーティーを堪能しました。



丹後・由良の海ゆらゆらPW (H21.7.11~12)

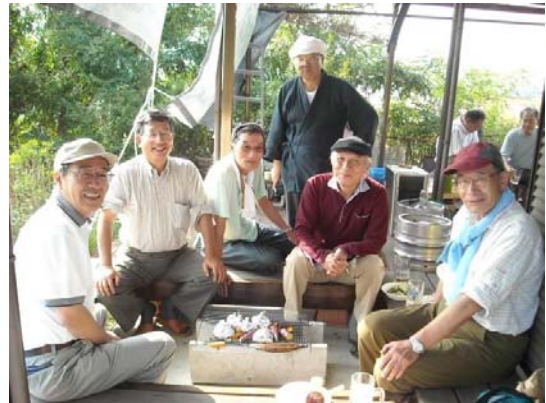
現地らしい食材の調達、ロケーションと設備に恵まれた晴海園の確保、使用器材の準備、現地での設営撤収、金沢富山の名品の差し入れ、それぞれ気持ちのこもった持ち込みなど、皆さんの尽力が纏まってこんな楽しい宴が出来たのでしょうか。







❖ 秋刀魚パーティー (H21. 10. 3~4)



近畿支部創設者である篠島さん（8期）に  
5年間の労をねぎらって皆さんから感謝状贈呈

## KUWV 関東支部懇親会について

9期 山中 重夫

OB会事務局より、関東支部のOB会の懇親会の記事をとの要請があり、4ヶ月前の記憶を思い出し、筆を取ることにします。

懇親会は今年で5回目になりますが、発足の動機は以前より、近畿支部の活発な活動に刺激され会社を辞め無職になったのを機に5年前に呼びかけ発足しました。(関西に出来ることが、日本の首都で出来ないはずがないとの対抗心が関西出身の私の脳裏に強くあったのが、本当の動機です。)

原則として、各種行事も比較的少ない6月の第1週または2週目の土曜日の夜の開催としています。

前回までは、7期四十万さんの紹介で、田町のレストランで開催していましたが、“KUWV”の看板が、田町にある慶応大学ワンゲルと間違われてはとの思いで、今回は東京駅近くの居酒屋「北海道」で19名の参加者を得て、開催しました。

発足以来、司会を8期藤井さんに、会計を9期清水さんをお願いしています。

今年は、国土地理院出身の長岡さん(11期)より映画(剣岳「点の記」)割引券なしのPR、登内さん(3期)の金沢大学のOB会の様子、「東京北の都会」(四高と金大と合同OB会)へのお誘い、10期青柳さんのヒマラヤ紀行などの話があり1年ぶりの親交を暖めあいました。

(金大北の都会のHPアドレスはこちら  
<http://www.kanazawa-u.ac.jp/internal/graduate/event01.html>)

関東支部の特徴は、0期 田村氏(今回は残念ながら欠席)、3期 鈴木氏、登内氏など、創部に関わった先輩が熱心にご参加頂けることで、創部当時のことが聞けることも楽しみの一つです。

今後の展開としては、以前高尾山、丹沢の大山と2回の山行が開催されたが、是非とも年に一度はOB会での山行を実現したいのと、KUWV中部支部が出来、東名阪の連携がとれ、交流が出来ればとの夢を持っています。



K U W V O B 会野沢スキー  
(2009スキー日記)

9期 保田 敦

本行事は11期の森川、青柳両氏が世話役となり、毎年2月下旬の週末を中心に開催され、当方も最近では毎回参加している。

この行事は山頂付近のパウダースノーやスカイラインコースの長距離滑走を楽しめるスキーと共に、野沢の各所にある湯治場/巡りや夜の部の定例となったお茶会、ゲスト参加者のピアノや琵琶演奏が楽しめる他、参加者のヒマラヤトレッキングのライドショー鑑賞等を各自が持参した各地のお酒や銘菓等を頂きながらの盛りだくさんの内容になっている。また、加藤氏は各自のスキー滑走や夜の部を愛用のVTRカメラで撮影、後日編集及びDVD化し、希望者に配っていた。

2日目は天気にも恵まれ、綺麗な写真や絵も集まり且つ、カメラマンの加藤氏の撮影内容も冴え、前2作品よりも良いものになったと自画自賛している。

しかし、息子さんが3年前に初ボータスで買い、加藤氏にプレゼントしたハイビジョンVTRカメラに切り替えたが、DVD化するためのハード及びソフト環境がなく、また多忙等の理由により、当方が代わりに編集及びDVD化した。今回が3回目の作品となった。

ハイビジョン版の動画編集には手がかかった。スキー滑走等の高速移動体等にゴーストが発生しやすいので、前年度はプロも使用する編集ソフトのデモ版を用いて解決したが、今年はデモ版の期限切れで使用できず、さりとて10万円以上する本ソフトを年金暮らしには手

が出せず、アマチュアが使用する編集別ソフトを新規購入したが、それではDVD化出来ないのでは、従来使用していた編集ソフトとの併用でなんとか本トラブルを少なくした。また、ハイビジョン動画のファイルサイズも大になり、編集集中にパソコンが度々フリーズ。操作中にこれまでの編集内容が消えたり、こまめに保存したり、再起動が頻繁になったので、フリーズしにくいOSのビスタが使用できる環境にPCを改造し、本トラブルを乗り切った。

今年に加藤氏は張り切って撮影したので、生テープが3本の約3時間分あった。それで、DVDに収める事が出来ず、編集作業と前述の各種トラブルにより、3月上旬からその作業を開始し、完成したのが6月初めになってしまった。

今回は苦戦しながらも、新たにハイビジョン仕様のブルーレイ版も作成し、動画、写真、絵を提供された方全員と今回の行事に参加された希望者にお届け終わったのは6月末。送付した方々全員からは丁寧なお礼のメール等を頂き、作成した甲斐があったと思っている。

さて、今年の本行事は2月27日(金)～3月1日(日)にわたって開催された事業を、DVD制作を通して当方の目で得られた参加者の活躍ぶりを以下に紹介したい。

0期の田村氏は、宿舎で保管していた時代物のスキーも処分され、最近スキーは全くされませんが、例年通り参加され、頭が下がります。また、暁の水練ではないが、ゲレンデでスキーとストックなしの「エアースキー？」をカメラの前で披露、しかも転倒シーンのサービスもあり、しっかりそのシーンもDVDにいれた。

4期の佐藤氏は昨年からの参加で、フルマラソンに度々出場するスリムな体型で軽やかに滑っていた。その体型と行動は後輩に多大なる影響を与えたと思った。違いますか？高田さん。松下さん。

7期の村田さんは長年の大学勤務を終えられ、少しお暇になったせいか、久しぶりの参加だが、その滑走ぶりは大きなゴーグルを取らなければ、そのお年が失礼ながらわからない程迫力がありません。スキーに疲れるとストックから愛用カメラに持ち替え、展覧会に度々入賞される腕前で綺麗に晴れた山々やガス中の木々を撮影され、その素晴らしい作品をDVDに掲載できた。また、今回「リバイバルしたベテラン女優」とのニックネームも皆でつけさせて頂いた。更に夜の部では舟田さんと共に和服に着替えてお茶のお手前を披露され、美味しいお茶を頂いた。



お茶会（佐藤氏 撮影）

8期の山村氏と野村氏は今回初参加で、山村氏の大型RV車で村田さんを乗せ、金沢から金曜日早朝に宿に登場、一人で前泊入りした加藤氏の情眠を脅かした。お昼のスキー、お湯巡りや夜の部も楽しんでおられ、来年も参加したいとお二人とも宣言。

9期の山中氏は、関西弁が抜けず相変わらずにぎやか。数年前からスキーを再

開し、スカイラインコースでは口数少なく時間をかけて滑っていたが、最近、百名山をクリアした由。ワングル OB では確か二人目で立派。

10期の参加はなく、最大派閥の11期ではこの行事の幹事長である森川氏が今回事業により不参加で残念。そのため同期の青柳氏が一人で今回幹事役を務めたが、予約等のハード面の青柳氏、参加者への配慮等のソフト面の森川氏と前回までのコンビでお世話になっていたが、やはり森川氏がいないと何か寂しい。

青柳氏はカービングスキーにかかる情熱はすごく、また昨年秋にヒマラヤトレッキングに行き、綺麗なスライドショーを夜の部で見せてくれた。

加藤氏は兵庫から四つの交通機関を乗り継いで毎年参加しており、そのVTR撮影の腕前と足前？は素晴らしい。特に後者は、ストックなしでスカイラインコースを滑りながらの撮影であり、余人には代えられないもの。そのせいかストックを持つての滑走ぶりはイマイチ？である。

上村氏は例年通り横浜から夜行バスでの参加。今回、やまびこゲレンデで眼鏡を壊す程の大転倒をしたせいか、来年以降は温泉主体のスキーにすると宣言。

高田氏はまだ現役のせいか、その巨体は健在。以前参加した際の怪我がトラウマで残っているらしく、もっぱら麓のスキー場で楽しんでいるが、その滑走ぶりを見た人は少なし。



ゲレンデにて（青柳氏 撮影）

12期の野村氏は久しぶりの参加で、リタイア後岐阜に引っ越され、近くなったので、今後の毎回参加が十分自他共に期待される。彼は「ヤング野村」、8期の野村先輩は「オールド野村」とのニックネームが今回付いたが、その風貌は全く正反対。

13期の辰野氏は、今回ご子息の同行はなかったが、ワゴン車で金沢組を乗せて例年通り参加。豪快な滑りとTV画面に映えるウェアでその足跡を残していた。また、ゲレンデでは金沢組や初心者の面倒を良く見ておられ、幹事も頼もしく思ったでしょう。

第2派閥であった15期は、今回常連の奥名氏が仕事の都合で不参加。上馬氏と舟田さんの二人と寂しい状況。しかし、舟田さんはナカオ山岳会メンバーである寺西さんと杉森氏をゲストとして連れてこられ、今回18名と例年並となり、舟田さんに感謝。山中さんと同様に舟田さんのスキー滑走を早送りで掲載したが、そのDVDを見てもっとスマートになるように、画面の縦横比率を変えて掲載要望あり、来年の宿題とした。

20期の松下さんはゲスト以外の参加者の中では最年少ながら、その風貌や体格は先輩に決してひけを取らず、しかも0期の田村御大とウマが合うらしく、田村氏のご高説を一番真剣に拝聴していた。

ゲストの寺西さんは、村田先輩の「リバイバルしたベテラン女優」に対して、「新人女優」との愛称が付いたが、その説明は省略。又彼女はスキーの合間にやまびこゲレンデで趣味の絵筆をとられ、その作品もDVDに掲載した。

杉森氏は、ワンゲル連中の行動や言動

に少し圧倒されたせいか、いくらか物静かな雰囲気であったが、スキー、温泉、夜の行事を十分楽しまれた事と思っている。

最後に9期の当方は、本行事の約2週間前のテニスで、右足に肉離れを起こし、場合によっては本行事に参加できない旨、青柳氏に連絡したところ、”同期を勧誘した手前、貴方が参加できないとは何事ぞ！這ってでも参加しなさい”とのお叱りの言葉を頂いた。幸い痛みも和らぎ、肉離れの治療湯治も兼ねてと思い野沢に入ったが、滑り出すとついつい痛みも忘れ夢中になり、皆さんの後を追走していた自分でした。

以上

#### 【お知らせ】

なお、この模様を収めたハイビジョンまたは通常のDVDが有りますので、ご希望の方は、ご遠慮なく下記アドレスに連絡願います。

Atsushi.hoda@nifty.com



集合写真（佐藤氏 撮影）

## 『KUWVOB南竜集中PW2009』

8期 山村 嘉一

**日程**：2009年7月25日～27日

**コース**：各自の状況に合わせて、自己責任で白山の南竜ケビンに集まろう!!

### 参加メンバー

7期 村田 泰恵、吉村 弘二

8期 伊豫 欣二、篠島 益夫、藤井 信晴  
柳川 徹 山村 嘉一

9期 谷道 正晴、鍋島 武、山中 重夫  
吉田 幸造

10期 伊豫 敦子、島林 仁司

以上13名。うち25日一泊は、篠島、鍋島  
26日一泊は、谷道、吉田 以外は全員二泊

以下、記録を付ける習慣が、非常に薄れてしまったうえに、記憶も斑ボケになりがちで、日時や人、出来事までが入れ替わることが多いのですが、鳥越さんの勧めにより、雑駁なご報告をさせていただきます。間違いが色々あるでしょうが、お許してください。

### きっかけ

そもそもの始まりは、昨年(2008年)の創部50周年記念式典の二次会。そこで、酔いが回ったこともあって、『白山の南竜に集まるのはどうやるか?』、『そりゃ好い! やろうや!』、『行く、行く!』と盛り上がったのであった。この二次会は、8期の先輩に当たる方々を中心に、前後の期の人たちが現役時代に、何の下心もなく? よく飲みに行った人も多い“おでん吉田”さんの(当時)お嬢さんがやっている“バー秋子”に集まったものである。その時のメンバーは以下の17名であった。

中川 皓三郎(6期)、穴田 昭一、伊豫 欣

二、高水間 淑子、小谷 太平、篠島 益夫、野村 孝弘、藤井 洋治、柳川 徹、山村 嘉一(以上8期)、伊藤 俊成、白井 勇、鍋島 武、平村 耕作、保田 敦、山中 重夫、吉田 洋次郎(以上9期)

ご覧の通り、冒頭の参加メンバーと比べてみると、お酒の影響がかなり大きかったことが良く窺える。(もっとも参加したい気持ちは強いものの、どうにも都合のつかない事情の人がほとんどでしたが...)

8期としては、2003年9月に同期会を湯涌温泉一泊でやり、楽しく、懐かしいひと時を過ごした。その時も元気な人は遠方からの参加にもかかわらず、前後にそれなりの山行を組み合わせた人が何人もいた。しかし、それ以降、8期の連絡責任者である山村は、何かやりたいなあ～、それも温泉一泊というのはワングルOBとしてはちょっとさびしい限りだし、最大公約数的な行動範囲とすると医王山往復ぐらいを絡めるくらいしかないかなあと考えていた。その後、山村の胸の内には、白山の南竜のケビンならば、各自がそれなりのペースでゆっくりと集まることができるのではないかというアイデアが湧いてきた。それが50周年の二次会で一気に盛り上がった訳であった。

それから約半年後の2009年4月1日午前9時が白山の夏山シーズンの宿泊施設の予約受付開始である。当然その時刻を待ってダイアルしたが、何度やっても話中音。午後になってようやくつながったが、7月25日、26日各2室の希望のうち、25日はかろうじて最後の1室のみ、26日は2室の確保ができた。その後、メールやメールをやらない人には往復はがきなどで案内をして、『KUWVOB南竜集中

PW』なるものが、どうにか実現した。

しかし、世話役山村の心がけが悪いのが、一番良い時期を選んだつもりだったが、お天気は良くなかった。山村はそれなりに気を遣って、7月5～6日一泊の“偵察行”をやったが、この時も天気は芳しくなかった。

#### 7月25日(1日目)

さて、当日、山村は3:00前に自宅を出発し、途中、鍋島さんをピックアップして、市ノ瀬到着が4:25。すでに駐車場はかなり埋まっており、別当出合行きが一番バスには列ができつつあった。雨は降ってはいなかったが、良くない気配。バスはすぐに一杯になり、定刻5:00の少し前に出発、5:17には別当出合から登り始めた。お酒を欠かすことのできない山村は、2リットルの“箱入り清酒”を、馬力のある鍋島さんに持ってもらったが、それでも15～6kgのザックは歳には重く、彼に置いて行かれないように、彼の前をゆっくり歩いた。鍋島さんにしたらじれったかったことだろう。途中からは時々雨や風に見舞われながら、コースタイムをかなりオーバーした9:07に南竜の受付棟に到着。早速ロング缶で乾杯した。鍋島さんによれば、現役時代も鍋島、山村のコンビ山行には雨が付きものだったとのこと。

その後、南ア縦走途中から引き続いて参加の篠島さん、東京から飛行機組の吉村、柳川さんに、一緒になった村田さん、これも東京方面から自家用車で来た山中、藤井さん、さらに大阪を早朝に発ってきた伊豫夫妻、島林さんの順に風雨の中を歩いて来られて、本日の宿泊予定者が全員揃った。現役時代に習慣化させられた細引の携行が、濡れた衣類

を吊るすのに役立ったが、ケビン内に細引を結び付けるフックなどが無いので、ちょっと苦労した。

天気も悪いし、まあゆっくりしようやと持ち寄った、お酒、ワイン、ウイスキーなどのアルコール類の他に、自家栽培の自慢のトマト、キュウリなどが並んだ。

山村としては、来年や、次回のことなど考えてはおらず、とにかく今回をやれば、次は誰かやりたい人がとのつもりだった。しかし、話題はそちらの方に進み、毎年梅雨明けが遅くなっているから、8月に入ってからの方が良いとか、土日は避けた方が良いとかで、早々と来年は8月5日(木)～7日(土)でやることに決められてしまった。

ケビンは定員5名では広すぎるが、11名では少々窮屈。それでも室堂山荘にギューギュー詰めになることと思えば上等。尤も、伊豫(欣二)、島林さんが、寝具や敷物入れの戸棚状の所を二段ベッド方式で我慢。

夕食後のケビンでの二次会には自然解説員として入山していた奥名さんも加わり、ワイワイガヤガヤと懐かしい話に花が咲いた。村田さんが昔のワングル歌集から今回のために抜粋・編集してこられた歌集で、久方振りに歌も歌った。

#### 7月26日(2日目)

濃いガスと雨でどうしようもない。そんな中、鍋島さんが6:48に、次いで篠島さんが下山。残ったメンバーは天気が良いければ、頂上周辺からお花松原あたりのワンデリングを考えていたが、とてもその気になれない天気。そのうち少々雨が止み始めたので、せめてエコーラインで花でも見ながら、室堂まで行ってみようということになって出発したが、エコー

ラインの途中で再びドシャ降り。見る間に登山道が小沢状態になり、引き返すことになった。南竜山荘の乾燥室などを使わせて頂いたり、この日の自然解説員のスライドによる解説を聞いたりした後、ケビンでの沈澱と相成った。

この日、谷道、吉田さんが入山。

夜、雨が上がり、いつとき、福井方面の夜景がきれいに見えた。(前夜だったかな?)

#### 7月27日(3日目)

相変わらず天気の良い中、谷道さんが早々に下山。みんなも様子を見ながら、雨の中をゆっくり下山することになった。元気な吉村さん、柳川さんは分岐点から、黒ボコ岩へ登り返して観光新道を下山(しかし、かなりしんどかったとのこと)。伊豫さん他数名も途中まで花を見に。下るに従って雨も上がり始め、無事別当合に到着。新装なった白峰の総湯に浸かって、解散となった。後は、蕎麦屋へ寄った人、岩魚を食べにどこかへ立ち寄っ

た人、早くビールを飲みたくて自宅へ直行した人など、それぞれであった。

雨に降られっぱなしだったのに、とても楽しかった、来年もまたやりましょうという、メゲルことの知らない皆さんでした。

以上

ところで、『KUWV 南竜集中 PW2010』は、2010年8月5日(木)～8月7日(土)で行われる予定です。(ケビンの予約は、2010年4月1日の電話のつながり方次第です。)

参加ご希望の方は、8期山村まで、ご一報ください。なお、連絡先は以下の通りです。

住所; 〒920-0335 金沢市金石東2-7-8

自宅電話; 076-267-4704

PCMail; spsf55t9@song.ocn.ne.jp

携帯電話; 090-215-6099

携帯 Mail; yskzymr@docomo.ne.jp

こんな感じで2泊3日の住居？  
表示をしました



26日の朝ガスに包まれたケビンの前で  
1日目お泊りのメンバー





テントと違って沈殿してても快適そうな様子



2 晩目の夕食時のカンパ〜イ



ようやく雨が上がった中飯場で、水かさの増した不動滝を背に2日目お泊りのメンバーのうち無難に砂防新道を下山してきたメンバー

## OBの皆さんからの投稿ページ

OBの皆さんから、個人山行、グループ山行、同期会など、いろいろな活動報告をたくさんお寄せいただきました。ここで紹介させていただきます。

(事務局ではOBの皆さんからの原稿をお待ちしております。簡単なものでも結構ですので、いつでもお送りください。送り先など詳細は、このやまざとの最終頁をごらんください)

### 2009 K O B E 六甲全山縦走 大会に参加して

4期 佐藤 秀紀

だいぶ以前にこの大会のことは人から聞いていて、一度は参加したいものだと思っていたが、今回、知人(元職場金沢大学の教授でマラソン仲間)から地元神戸の人(知人の研究室の社会人ドクターコース学生)が参加するので一緒に参加しませんかというお誘いがあり、すぐに参加の返事をした。その後、誘ってくれた本人の都合が悪くなり直接は知らない地元の人と一緒に参加することになった。

この大会は関西の山に関心がある方ならばよく知られた歴史のあるイベントで、登山大会としては大正11年の頃にその端緒を見出せるとのこと。また、その先をたどると、神戸が港とともに外国人の居留地となり、その外国人が風化した崩れやすい単なる荒地に山登りという楽しみの対象としての価値を見出し、指導し、開拓してくれた。日本登山史と深くかかわっている地、イベントでもあるらしい。その中には明治の一時期神戸に滞在し日本の近代登山の先駆者といわれるW・ウエストンもいる。現在の形式の大会は、昭和50年(1975年)に第1回が開かれ、今年が第35回大会を迎えている歴史ある大会である。大会は瀬戸内海国立公園内にある「六甲山地の自然に親しみ、体力の限界に挑戦する」イベントとして「六

甲全山縦走市民の会」と神戸市が主催する神戸の“歩くスポーツの祭典”と位置づけられている(大会資料より)。

開催は毎年11月の第2日曜日と23日に行われ、定員は各日2000人で、申込書は窓口で今年より一人5部まで購入(1部1500円)出来るようだが、即完売となるとのこと(郵送もあるらしいと地元の人には言っていたが)。

コースは須磨浦公園をスタートとし、六甲山系を縦走して宝塚に至る全長56km、累積標高3000mといわれ、山の数は14を数える(最高標高は931m)。制限タイムはスタートチェックが5時から始まり、ゴール最終が22時40分である。昨年の平均完走率は82.9%(年代別では60歳代が最も高く86.0%であった!)。案内パンフレットの最初のページに「60歳以上の方は負荷心電図の検査を受けておいてください」とあるように、なかなかの大会である。なお、最近ではトレイルランという山岳マラソンが盛んになり、この大会も「縦走」という名前がついているので、その種の大会と間違つか、そのトレーニングとして参加する人が多くなっているようで、参加要綱には決して走らないで下さいと何度も注意してある。ちなみに、なぜ「縦走」という言葉を使うのであろうか。語源は知らないが、中国語では「走」の字は「歩く」の意味である。漢語からきた言葉ではないか。

私の今回の参加目的は、ウルトラマラソン(42.195kmより長距離で普通は100km以上を指す)のトレーニングを兼ねて六甲山系縦走にチャレンジしてみたい、というものである。ワングル時代に山歩きの洗礼を受けて山に魅せられたが、40歳頃からはマラソンにも魅せられ、現在マラソンの方が費やす時間は多い。3年半ほど前に職(大学教員)をリタイアしてからは、ますますその傾向が強い。数年前よりウルトラマラソンに関心があり、今年5月には萩往還140kmを走り、来年1月には宮古島100km、5月には「さくら道」(名古屋 金沢270km)を走る予定。

当日、朝3時半三ノ宮のホテルで起床。食事準備後地元の人と4時半にタクシーで須磨のスタート会場へ。もうすでに長蛇の列。5時にチェック開始だが順番待ちでわれわれは5時半スタート。まだ暗く手持ちのライトをたよりに最初の鉢伏山を登る。時折見える須磨の町の明かりが美しい。団地へ降りて次に樽尾山への400段のコンクリートの長い階段を登る(6:40)。ここでは度々渋滞で立ち止まらねばならなかった。その後も急登では渋滞が起って前に進めないことが度々あった。

2000人も人が一斉に歩き始めるのだ

須磨アルプス



から無理も無いことだが。横尾山頂を過ぎるあたりから山道は一変して茶色の岩肌がむき出しになって起伏にとんだ異様な景観の「須磨アルプス」という難所に至る(昔はほとんどがこのような土地であったが、次第に植林されていって昔の状態の残るのがここだけだと、知人は説明してくれた)。その中の「馬の背」では道幅の狭いガレ場を通らねばならず、渋滞が起こる(7:23)。住宅街に下りて再びこんもりした高取山を目指す。高取山の金高神社鳥居をすぎたあたりに小公園があり、トイレがある(8:46)。再び住宅地へ降りてかなり歩き「ひよどり越」駅を過ぎ、水道施設から菊水山の急登の階段に向う。急登を登り切った広場が菊水山CP(チェックポイント)で、チェックカードに印を押してもらおう(10:08)。ここまで4時間半あまり休まず来たので小休止し、おにぎりなどを食べる。

菊水山を下り始めると、向こうに鉄塔のある鍋蓋山が見える。天王吊橋を渡るとジグザグの急登が待ち受け、かなり汗をかきながら登ると平らな鍋蓋山頂上に至る(11:06)。なだらかに下ると大竜寺に出て自販機がある。立派な山門の横を通り、しばらく歩くと広い川原の市ヶ原キャンプ場に出る。ゆるやかに摩那山へ登りはじめ、最後に天狗道の急登を上り切るとアンテナ塔が立つ摩那山掬星台CPがある(12:47)。ここではホットレモンのサービスを受けることができ、汗だくの疲れた体に温かい甘すっぱい飲み物がなんとも嬉しい。ここで約半分の行程である。しばし休憩で、食事とトイレ、水の補給などを行う。ロープウェイがここまで来ており、あたりは一般の人も多い。眼下には少し霞んでいるが、神戸の市街が海まで見渡せる。

休憩と食事で元気を取り戻し、後半の出発である。これからは舗装された一般道を歩く。車が通る道を歩くのは「縦走」という名前にはふさわしくないが、それだけ開発されており、尾根道はいたるところで寸断されているということである。ここは尾根道とドライブウェイのどちらを歩いてもよいということになっており、われわれはドライブウェイを歩く。丁子ヶ辻(13:50)、六甲ガーデンテラス、一軒茶屋(ここが最後の自販機)と延々と歩く。鉢巻山トンネルを過ぎたところに最後のCPである東六甲縦走分岐点CPがある(15:09)。ここは道路上にテントを置いただけのもので休憩場所はない。

CPからしばらくして自動車道からはずれ再び山道に入る。ここからは一部舗装道路もあるが、ほとんど林の中の細い山道となり、多少の登りはあるがゆっくりと下っていく。ほとんど平坦に近い山道なのでハイキング道としては気持ちのいい道ではないだろうか。ただし、秋の日は落ちるのが早く、今はもう薄暗くなり始めているので、ひたすらゴールに向けて早足で歩き続けた。途中、何箇所かボランティアの方たちが待機してガイドに当たっており、これから暗くなって通る参加者の誘導にランプを用意していた。

最後、近くにはところどころに急坂もあり、暗闇をヘッドライトの下で通ることを想像するといやな気分になった。萩往還 140kmのときに夜道に迷ったことを思い出す。最後は急な石段を降りると住宅街の舗装道路に出る。そこからは、ゴールまで間もない。

舗装道路の急坂を下るとき、一緒に歩いた地元の人というのでは「足膝がダメージを受けた人は、ここを正面向いて降りれず、後ろ向きに降りる」のだそうだ。

われわれは無事足早にこの坂を正面向いて下り、夕闇がせまるなか、17時10分無事ゴールの宝塚湯元台広場に到着した。神戸市長名の認定証と記念ミニ盾をもらい、12時間弱のお互いの健闘を称えて握手をかわした。

大体予想の時間であったが、渋滞がなければ1時間は早く着いたかもしれない。しかし、渋滞で体力を休ませることができたことを考えればちょうど良かったのかもしれない。一緒に歩いた人はフルマラソンをサブスリーで走る健脚人であり、渋滞がなければ私は途中でバテていた可能性が高い。自分としては目一杯の歩きであった。何が幸運かわからないものである。知人と別れて、近くの「宝塚温泉」に入って汗を流した後、長かった今日の完走の努力に独りビールで乾杯した。阪急で大阪に戻り、午後7時半のサンダーバードで金沢に10時過ぎに着き、長い一日は終わった。もう一度、こんどはゆっくりと六甲の山を木々や草花を楽しみながら歩いてみたいものである。



## 富士(?)登山

9期 吉田 洋次郎

卒業後しばらくは関東近辺で日帰り登山・スキーなどをやっていたが、ここ何十年かは、すっかりご無沙汰でした。

最近の中高年の登山ブームに刺激された訳でもないのですが、あの“富士(?)登山”に挑戦しました。挑戦というと大げさなんですけど、日帰りで登ってきました。久しぶりの山登りのため、ほこりをかぶっていた小さなリュックとスニーカーにジーンズといったスタイルでお散歩気分の装備でした。

“そんな装備で富士山へ”と思われる人もいるかもしれませんが、ちゃんと頂上での証拠写真もありますよ。“えっ!どこの富士山かって?”日本には富士と名の付く山が数多くありますが、その中でも名峰と呼ばれている八丈富士です。標高は実に854mです。

朝7時半過ぎに羽田を出発して約1時間弱で八丈島空港に到着し、登山道入口まで車で移動。そして念入りにストレッチなど準備運動して、いよいよ出発です。

入口にはノヤギ(野山羊)を捕獲するためのゲートがあります。1,280段の階段をゆっくりゆっくりと、最後はあえぎながら約50分かけて火口が望めるところまで登り、そこでベンチに腰をおろして涼しい風を受けながら一休み。

息が整のったところでお鉢巡りへ

出発。火口稜線を時計回りにしばらく歩くと伊豆諸島のなかの最高峰の八丈富士頂上へ到着。そこで記念撮影。道はあまり整備されておらず、馬の背のような箇所もあって慣れない人には結構危険なところもありました。約50分掛けて一周して見晴らしのいいところでおにぎりとお茶で空腹を満たし、下りに。

わたしの歩幅と階段のステップ幅や高さがうまく合わないのと途中で膝がガクガクしたため、危うく転びそうになることも度々でした。それでも何とか約20分で下山できました。

あいにくの曇り空でしたが、それほど寒くもなく、いい汗をかくことができました。その後、筋肉痛や疲労回復に効くという温泉に入ってゆっくり汗を流し、黄八丈の製造工場などを見学して空港へ。売店で八丈の代表的な味覚「島寿司」をみやげに買って夕方の飛行機で羽田へ、無事帰宅しました。

1週間ほどは、ふくらはぎと太股の痛みにも悩まされ、とりわけ階段を降りるのに苦労しました。日頃の運動不足を痛感した昨年晩秋のことでした。



## 南ア・三伏峠から

塩見岳・間ノ岳 (2008.8.1~8.3)

荒川岳・赤石岳 (2009.8.27~8.30)

### 6期 合津 尚

三伏峠は伊那大島から路線バスが1600mの登山口まで夏期限定で入ってくれるので、登りが大変楽であることを発見。さらに三伏峠小屋が2600mにあり、初日としては手頃な位置にあるので気に入っています。

さて、「三伏」とは仏教用語のようで、夏の3ヶ月間、僧が1個所に隠って修行することから、夏至以降3度目の庚の日を初伏、次の庚の日を中伏、立秋直後の庚の日を末伏で、三伏という。

庚とは...切りがないし本題から外れる。日本一標高の高い峠とかですが、人跡稀な坊さんの修行の場であったのだろうか。

去年は、今年と異なって梅雨明けが明快でタイミング良く、予てから遠望していた塩見岳に三伏峠からチャレンジしました。三伏峠で一泊し塩見岳から熊の平で泊まり、次の日は北岳あたりでのんびりする計画でした。

早朝から12時間歩いて熊の平小屋に到着して、そろそろ寝る時刻になった頃、小屋の主人に呼び出された。正確には話が伝わらないが、どうも親が急死したらしい。

小屋から数百m離れた見通しの良い尾根で幸いにも携帯が通じる方向があるとのこと。夕闇迫る頃であったが家内と連絡が取れ、父親が急に亡くなったことが判明した。便利な時代になったものだが、何というタイミングにと腹が立つやら、あせるやら。97オになる年で何時でもあり得ることもあったので、葬儀をどの程度の規模にするとか、喪主は誰にする

とかは兄弟で話をしていたのだが、実は喪主を引き受けていたことが問題で、あせった。

さて、通夜は明日の3日であろうし、この一番深い南アの山中からどう脱出するか？

朝から12時間も歩いた後だし、このまますぐに歩いて下山してもまだ夜であろうし、一旦、寝て夜中から間ノ岳手前の三峯山から広河原の両俣小屋に下りて、そこからバス道に出ることにした。夜中の1時から歩き始めたが月明かりが無く、ライト頼りの登りで三峯岳でも2999mあってかなり苦労した。問題はそこからで、仙塩尾根の悪い条件でのヤセ尾根の下りは正直緊張した。ヤセ尾根を夜降りるバカがいるか。その後、バス・タクシーを使い、甲府から特急を乗り継ぎ、上野で山の装備から喪服に着替え、田舎のいわき市に着いたのが午後5時、ひどい目に遭った。

今年はそんなわけで、8月1日は親の命日でもあったし、天候不順や仕事やらで盆休み前は動きが取れず。やっと天候と仕事を含めて目処が付いたのが8月も終わりになってから。この時期に山に入るのは初めての体験で、まず、台風情報を確認した。天候はまずまずで晴れたりガスが出たり、草花もあり残雪も僅かであったが、まだ夏山の雰囲気が残っていた。初日は例の三伏峠小屋泊まり、次の日は12時間かけて荒川・前岳の急坂を登り、南アでは珍しい水の豊富な荒川小屋泊まり。三日目は赤石岳から一気に2,000mの下りで榎(サワラ)島へ。途中の富士見平での眺望はすばらしかった。東海フォレスト経営のロッジに泊まり、風呂に入りビールを飲んだ。

さて、東海フォレストという東海パル

プの系列会社が、この辺一体の山小屋から登山道を独占していて、国立公園の真ん中に何故私有地があるのか以前から疑問であった。宿の支配人に尋ねたところ、明治期に政商で駿府ではなく、新発田藩出身の大倉喜八郎が買い入れて事業化したとのこと。帰宅してネットで調べると、当然ながら、以前は徳川幕府の天領であり、その後元大名の酒井家が管理していたのを明治28年に本人が購入した。この人は有名な戦争商人で、ホテルオークラ・大倉シャンツエに名を残し、大成建設・サッポロビールその他の創業者。ここで関連の大倉商事の破産に巻き込まれた苦い経験を思い出した。

さてこの区域は、間ノ岳から塩見岳・聖岳・白根山系を含む広大なもの。山手線内の面積の4～5倍もあるそうで、一区画としては日本最大の私有地とのこと。それにしても昔のことながら豪快な話である。

この私有地から出て、バスを乗り継ぐ所が畑薙第一ダム。今話題のダム建設では創成期の有名なダムで、昭和37年の完成で当時の花形工事であった。ダム本体の中身が中空構造の珍しい形式で、小生が大学の学部を決める時に影響を受けた思い出深いダムであった。その後、卒業する頃にはダム建設も陰りが見えてきて、橋梁建設に人生変わってしまったが。

その変わったはずの分野だったが、系列の会社では「八ツ場ダム」のTVでよく映る橋を建設中、立場や見方はあるだろうが、昨今のダム建設の悪役説は空しい。

## 地を這うワンダラー

(鎌倉～金沢400キロ・・・オヤジの自転車旅行)

20期 松下 和隆

### 1. プロローグ

ワンダラー...

なんて魅力的な響きなのだろう。

自然を愛し、自由を好み、ちょっぴり冒険好きで、人恋しき者達...

それは、若きワングル時代の原点。

いつも心の奥底で、チラチラ燃えている「魂」。

機会あれば、いつもそれを形にしたいと思っている。

それが、金大ワングルOBのオヤジ達であり、そして、オバハン達なのである。

現役諸君！

君たちも、やがてこの気持ちが分かるようになるだろう。

### 2. 旅の行程

なんていう説教めいた書き出しは、もはやオヤジの証拠である。そして「ワンダラー」と「ライダー」を、ざっくりと一緒にしちゃうところも、オヤジのええ加減なところである(許しておくんははれ、若者たちよ)。

四の五の言わずに、今回の旅の行程を以下に記しておこう。

9/20(日) 走行距離(90km)

鎌倉(由比ガ浜) 厚木 相模湖  
大月

9/21(月) 走行距離(106km)

大月 笹子峠 葦崎 諏訪

9/22(火) 走行距離(86km)

諏訪 松本 安房峠 平湯温泉

9/23(水) 走行距離(141km)

平湯(国41号) 神通川 南砺波

福光 金沢大学 金沢（内灘）  
この旅は、鎌倉の由比ガ浜から始まる。  
そして、金沢の内灘で終わる。太平洋から日本アルプスを越えて日本海へ至る。  
走行距離、約 400 キロの自転車旅行である。

コースは、いたって単純だ。  
最初の 3 日間は、標高 1790m の安房峠を目指して、ただひたすら登るのだ。  
そして、最後の 1 日は、豪快に下るのだ。  
平湯温泉から金沢へ向かって、一気に下る。

何も足さない、何も引かない...  
この旅は、平凡で小心な、あるオヤジの、  
等身大の自転車旅行なのである。

### 3 . さあ、出発だ

サーファーで賑わう由比ガ浜。  
どこまでも続く、広い太平洋。  
男は、波打ち際に立ち、ひと滴の海水を、  
小さなプラスチック容器へと汲み入れた。

旅立ちの証...

それは、太平洋の水だ。  
しょっぱい海水は、長い道中の気付け薬  
となるだろう。

待ってるよ...

お前を日本海へと届けてやるぜ。

こんな臭いセリフも、気にならない。  
男はいつしか、青春ドラマの 1 シーンへと  
同化していくのであった。

さあ、出発だ！

颯爽と自転車にまたがる男。

朝日を背にして、男は 400 キロの道のり  
へと旅立っていくのであった。



太平洋の水

### 4 . 走れ、オヤジ

男は、秋の甲州街道を駆け抜けた。  
黄金の稲穂がまぶしい。  
これぞ、日本の秋だっぺ。  
暗くて長い、いくつものトンネルをくぐりぬけた。  
迫りくるトラックは、シュパン、シュパンと、エアブレーキを鳴らす。この国が、まだまだ車優先社会であることを、思い知らすかのように。  
安房峠に汗を流し、硫黄の匂いが鼻をつく神通川を、風のごとく駆け下りた。時速 50 キロの振動は、生身の体には強すぎる。ブレーキだ、ブレーキをかける。  
しまった、行き過ぎちまったぜ、スーパーカミオカンデ（小柴さんがノーベル賞を得た素粒子観測装置）。  
宇宙の粒子（ニュートリノ）に、会い損なった。

砺波平野は、ただただ広く、屋敷林が美しい。  
福光から角間へと続く静かな道（県道 27 号）は、しばしの癒しを与えてくれる。  
医王ダムの湖畔を通りすぎ、やがて男は、金沢市街が見渡せる峠に立った。



夕日が美しい。  
遠くに見える金沢の街、そして目の前に  
見える懐かしの学園...金沢大学。  
全てが、淡い光に包まれている。

男は、峠の坂道を下った。  
するとそこには、こぼれんばかりの笑み  
を浮かべた友がいた。そして、サプライ  
ズ！  
あう、あう、あう...、横断幕だ！



夕暮れの横断幕

夕暮れの横断幕...。  
これは、20期のF夫妻が作ってくれた。  
シルバーウィーク（連休）返上で作って  
くれた。

そして夕闇の中から、「松つつあん、お  
めでとう...」とボソリつぶやく、H氏(20  
期)の顔があった。

みんな、みんな、ありがとう。

男は泣けてきた。  
感謝と感動で泣けてきた。  
夕闇にまぎれ、目を涙で潤ませた。

#### 5. 日本海、そして融合

男は、内灘へと向かう。

ついにやってきた日本海。  
スカイブルー、そして紺碧の海。  
静かだ・・・  
カモメの鳴き声だけが、ときおり聞こえ  
る。  
男は、天を仰ぎ、意を決したかのように  
口を一文字に閉じた。そして、小さなプ  
ラスチック容器のふたを、キュッとあけ  
た。  
太平洋の水が、今や日本海へと放たれる。



日本海、そして融合

私の首にからまっている奇妙な物体・・・  
それは、栄養ドリンクの首飾りである。  
今回のゴールを記念して、F氏(20期)  
からプレゼントされた。  
まさに、友情は心の滋養なり...である。

#### 6. エピローグ

男は思った。  
今回の旅について...

自分ひとりでは、絶対に発想しない今回  
の計画。

その発想を与えてくれたのは、ひとりの  
後輩T氏(21期)だった。

「わしゃ痔があるし、自転車なんぞ論外  
やわ」

そう語る男に、T氏は根気よく自転車の楽しさを教えてくれた。そして、自らも超人的なパフォーマンスを実践し、男が忘れかけていた「チャレンジ」に火をつけたのだった。

男は、もう一度、思った。  
わしゃ、ええ後輩をもって幸せじゃ。  
わしゃ、あったかい友をもって幸せじゃ。  
金沢は青春の街。  
友の息づかいが聞こえる街。  
やって良かったぞい。  
オヤジの自転車旅行。

## 7. おまけ

男は、金沢到着後もなぜかテンションが下がらず、勢いあまって、能登半島の付け根に聳える宝達山（637m）にまで登ってしまった。  
金沢から国道8号を走り、宇野気から国道159号に移ろうとしたら、石川県警のイカツイおじさん達に呼び止められた。

「旦那さん、お楽しみ中すみませんのー。どこへ行きよるんですか？ほっほー、免田へ行きたいちゅうーわけですな。ほれなら、県道59号を走れまっし。国道は、危ないですさかい。」

意外にもやさしい口調で、道案内をしてくれるではないか。田舎の警察は、やさしおます。  
そこで男は、県道59号を走った。  
そして出会った。  
坂の上の雲。

自転車を始めて、かれこれ1年。  
妙に魅かれるのが、これなのである。  
峠の上にポツカリ浮いていて、いつもこ

う言ってるように思える。

今のお前には見えへんやろけどな。  
峠の向こう側はええで。  
景色はいいし、なんのし、希望がある。  
とにかく、はよう上がってこいや。

そんなメッセージを、いつも感じるの  
である。  
人生、まずは見えるところまで、行くこ  
っちゃ！



坂の上の雲

## 白神・八甲田・奥入瀬・十和田の旅

日程 2009・10・19(月)-24(土)

メンバー：6期/小川 修司、7期/村田 泰恵、8期/篠島 益夫・節子、高水間 淑子、  
9期/山中 重夫、10期/伊豫 敦子 計7名

昨年6月に実施の屋久島縦走時に参加メンバーから要望があり、今年の白神・青森ツアーが企画されました。今回も同じように来年前期の企画として、花の時期を狙った利尻礼文ツアーの要請が出ており、6月10日～20日前後で礼文あつもりそう、礼文うすゆきそう、利尻げんげ等を愉しもうという話だ。更に、来年後期や10年計画を立てて、という話も出たが、そこまでは私もお世話出来る自信が無く、せめて海外も含めて3年くらいなら皆さんと相談の上で、他の世話役の知恵も入れながら、大まかな企画を組めるかと思う。

19日、20日、21日の白神では、全部が天気に恵まれたわけではないが、何故か大事な部分は雨にも遭わずにすみ、最後まで感動と笑い一杯のツアーで終了できた。そんな訳で「やまざと」にも寄稿する事になった。

旅の記録まとめ 8期 篠島 益夫

日程・場所・写真	着時刻	発時刻	記録・写真
2009.10.19(月)ニツ森登山			天候:(大阪)快晴・(白神)曇り後雨
伊丹空港	10:15	11:15	集合・チケット渡し・搭乗手続・機内昼食準備 *山中さんは前夜東京からバス便で大館能代空港へ ANA1667で出発
大館能代空港	12:45	13:15	レンタカー1号車、2号車の借用手続 登山準備
秋田県八峰町・ぶなっこランド	14:30	14:40	*節子さんはブナっこランド遊歩道を散策。 登山口には下山者が数名いて今から登るという我々に
白神山・ニツ森登山口	15:10	15:10	アドバイスをくれた。集合写真後直ぐに出発した。 登山道は連日の雨で汚れやすいが、16:30までに戻らないと ヘッドランプが必要となりそうなので急ぐ。 村田先輩がスピードをあげているので追いつくのが大変だが、 先輩1人では心配なので私が追いかけるように登るが、 村田さんには追いつかない。 (秋田青森県境辺りからは世界自然遺産指定地域) 漸く追いついたら先に行け、との事なのでそのまま登り続けて展 望のマシな尾根筋に出たが、天候が怪しくなってきた。 そのまま頂上へ、頂上の場所は少しわかりにくい。 しばらく待っている間に雨が降り出し、カッパを用意している ところへ村田さんが到着。雨具を途中でつけていたために遅れ て皆が到着し、記念写真後直ぐ下山開始。雨がみぞれに 変わってきたが、すぐに納まってきた。
白神・ニツ森頂上(h1086m)	15:45	16:05	
登山口	16:35	16:50	
ぶなっこランド	17:15	17:20	散策コースの節子をピックアップ
森山荘(青森県深浦町松神)	18:50		



入浴後の会食

日程・場所・写真	着時刻	発時刻	記録・写真
2009・10・20(火)白神岳登山			天候:(白神)くもり時々雨
起床(森山荘)	5:00	6:15	朝食・登山準備
登山口駐車場	6:30		ガイドを依頼した能代市の佐々木昇氏が先着しており ここで合流、車は我々以外に1台が駐車するのみ。雨は 直ぐには心配なさそうな按配の曇り空。
登山口	6:35	6:40	現在の駐車場の上部が登山口(旧駐車場) 登り始めは杉林を通過、直ぐに自然林になるが、きつい登り はなく、登っている感じはしない。二股分岐を過ぎて、今日は予 定の まで山 コースとは反対に、ガイドの意見で二股コースに 入る。ここからは登山らしくなる。
一の沢渡渉	7:45	通過	渡るときに、ほとんどのメンバーは、一部水没で靴に水が入る。
二の沢渡渉	8:05		またも靴に水が入る。佐々木ガイドは川中で誘導してくれるが、 皆さん渡り終わるところでザブコとなる。連日にわたり雨が続 いているが、水は実に綺麗だ。
二股	8:30	8:40	休憩らしい休憩だが、頂上までこれから2時間半以上はかかる という。足場の悪い急登が頂上まで続くとの注意と覚悟をガイド に促される。海拔240mから登ってきたが、たいした登りが今ま で無かっただけに、これからが大変だというわけだ。
二股 頂上・中間点	9:50	10:00	自然遺産との関係か、登山道も狭いし、急登が続く。ロープは あるが、階段ではなく山道そのものという感じ。ガイドのペース にはついて行けず。私が漸く追いついて休憩を要請したが、中 間点までは歩いてくれと、ガイドは後続組を励ましに戻った。や や標準ペースよりも遅れだしたので、下山時間を心配している ようだが、この悪路急登が続くのは意外な感じだった。 中間点から先も同様の急登が続くが、少し尾根状の場所に出 ると、日本海と海岸線がガスってはいれるものの、よく見える場所 や基地の森山荘が見下ろせる場所などが幾つか出てきて、白 く砕ける波まで見える。佐々木さんの言では、直線なら海岸ま で5km、森山荘まで9kmだ。
白神岳(h1232m)	11:35	11:40	二股コースでは頂上の直前まで急登。まず頂上に到着。空が 酷く怪しいので、急いで写真を撮ったりしているうちに、ざっと 雨が。昨日の二ツ森と同じで頂上までは雨に遭わずに登れた が、白神岳も同様だった。
頂上、白神岳避難小屋と トイレ小屋	11:45		少し離れた小屋に急ぎ飛び込んだが、我々だけであった。此 処でゆっくり昼食、ガイドも果物など差し入れてくれた。熱いコ ーヒーが美味しい。外は風と雨の本降りだ。 皆さん、高低差992mの割には5時間も掛けてよくぞ登ったもん だ、という感慨があったと思う。



日程・場所・写真

着時刻

発時刻

記録・写真

2009・10・20(火)

白神岳頂上避難小屋

12:10

下山路は まで山 コースで下山。このコースは、距離が登りの二股コースに比べて少し長いが急降下はなく、安心して下ることが出来る。また、深いブナの自然林が続くので紅葉が美しい。小屋からの下山初めは、雹と雷がしばらく続いたが、稜線を過ぎた頃から遠ざかり、雨も殆どあがってきたので歩きやすく、紅葉を堪能しながら下山した。少し日差しがあったら、もっと鮮やかな紅葉だったと思われる。



ブナの巨木



紅葉の真っ盛りの「まで山コース」

登山口駐車場

16:05

16:25

象岩

16:50

17:00

森山荘

17:05



会食・スライド上映(右手前・佐々木ガイド)

この日の会食は、佐々木ガイドも同宿になった為、一緒に会食した。白神の話に加えてスライド上映で色を添えてもらい、更に「またたび酒」や地元産どぶろくの差入を頂き、その味は2~3日後まで堪能させていただいた。

村田さんと節子さんは、別行動で竜飛岬と十三湖ドライブを堪能した。竜飛岬では名物の強風で、吹き飛ばされそうになったとの事。また、アナゴ丼は最高の味だった、とか。



白神岳登山口 (h 200m)

2009・10・21(水)  
十二湖・白神ラインウォーク  
森山荘

7:30



十二湖・八景の池



十二湖・青池

酸ヶ湯温泉

18:15



白神・くろくまの滝



白神ライン・天狗峠付近

前日は、白神岳登山に時間を要し、十二湖めぐりは全く出来なかった為、本日は十二湖めぐりから始まった。計画にはあったが、そんな事情で岩木山を取り止めることに昨日のミーティングで決まった。今日は森山荘に最も近い十二湖巡りからスタートした。

この日は、連絡不足や不注意も重なりトラブル大続出。しかし、なんとか収まった。最後は、宿泊予定の酸ヶ湯にほぼ予定に近い時間で到着。

《トラブル内容》

十二湖での1、2号車の集合地点の調整不足で時間ロス。十二湖付近のGSでガス補給後に村田先輩を乗せ忘れて出発してしまい、GSに戻ってピックアップ(どなりつけられるかと思いきや、以外に優しくしたので安堵した)。

携帯電話の置き忘れ・カン違いで、電話探し。2件連発。赤石川林道でやたらしく、くろくまの滝でタイヤがパンク。レンタカーなので道具探しから。タイヤ交換を済ませたが、悪路は運転しにくかった。

白神ラインは展望台が多く、天気も良いので紅葉見物に時間を要し、昼食が遅れ、ようやくレストランに到着したら3時で営業終了。腹をすかせた皆さんから恨まれた。

なんとか西目屋村に着いてGSを見つけたら、このタイヤは岩角でバーストしているのでパンク修理はできないと。タイヤも在庫がないので今から頼むがそれでも良いか、との話。トヨタレンタに電話したら、その場合は保険外なのでお客様負担で直して下さい、との事。

GSの可愛いお姉さんが頑張ってタイヤ交換と洗車もしてくれるというので、諦めてお任せした。

村で一軒しかないという食堂を、遅れた昼食をするために探したが、もう暖簾を上げてしまっており、万事休す昼飯にもありつけないかと思いきや、一番腹をすかせていると思われる女性が店に飛び込んで交渉の結果、なんとか麺類くらいはやってくれる事になり、ほっと一息できた。

こんな調子が続いてどうなるかと思ったが、この日は久しぶりに天気にも恵まれ、どこでも紅葉を堪能出来た。

報連相の不足から出たトラブルに加えて、よくぞこれだけ出て来たと思うほどのトラブル続出。GSのお姉さんが頑張ってくれたので、食堂から戻るとタイヤも新品交換、洗車もバッチリで、無事に酸ヶ湯に到着することを期して安全運転で向かった。酸ヶ湯の仙人風呂が、今日のドタバタを癒してくれたが、この日は山らしい場所に登ることは少なかったのに、昨日の白神岳往復よりも疲れた。

日程・場所・写真

着時刻

発時刻

記録・写真

2009・10・22(木)北八甲田縦走  
起床・入浴・朝食・登山準備

酸ヶ湯温泉

7:00

8:40

八甲田ロープウェイ下駅

9:00

9:20

大型 Gondola なので、満杯にはならない様子。ガスで視界はない。

ロープウェイ山上駅

9:25

9:45

節子さんは此処まで同行。この後はネイチャーガイドに同行して山上付近を巡り、再びロープウェイで下山。1号車で鶯の七沼ウオークに向かい、14時過ぎには酸ヶ湯温泉の大岳下山口付近で、我々登山組と合流。十和田温泉に向かう。



上毛無岱より霧氷の大岳

山上駅周辺と、たもやち岳頂上付近は、ガスっているので滞留はせず、たもやち湿原を通り、早々に宮様コースの下りに入る。しばらく下ると次第にガスも少なく、視界も広がって、たもやち岳頂上も見えるようになった。ただ、凄い泥んこ道で靴とカッパズボンに泥だらけ状態、上毛無岱が近くなると泥が少なくなり、草紅葉の毛無岱に到着。ここで本格休憩し、霧氷に包まれた大岳を見上げる。

上毛無岱

10:55

11:05

上毛無岱からしばらく進むと霧氷に包まれた樹林帯に入り、素晴らしい氷の芸術を次々と見せてくれる。ガスが再び濃くなり、気温が低下してくるので皆さんカッパや防寒衣を着込む。



上毛無岱 大岳避難小屋



上毛無岱 大岳避難小屋

大岳避難小屋

11:50

12:50

樹林帯を過ぎて小屋に近づくと凄い風だ。避難小屋に入ると沢山の人が休んでいる。中には強風のため大岳登頂を諦めた人もいようだ。兎に角、床に上がりこんで昼食とする。小屋は頑丈でなかなか立派である。



避難小屋とナナカマド

小屋脇に葉が散り、実だけを残したナナカマドの群生があり、霧氷と一緒に姿は超越した美しさだ。今時の普通の天候なら、こんな絵を目にすることは出来ない筈で、晴天ばかりでなかった19日からのツアーが、偶然に見せてくれた今度の紅葉と氷の芸術だと思う。

村田さん、山中さんは上毛無岱から下毛無岱を経て下山。

日程・場所・写真

着時刻 発時刻

記録・写真

2009・10・22(水) 続き  
大岳頂上 (h1584m)

13:10 13:25

小屋から 30 分のコースタイムであったが、登って見ると、20 分で頂上に着いた。風も小屋に入った頃よりも納まっており、飛ばされそうなことは無かったが、ガスは依然としてきつかった。登頂の途中でも霧氷が様々な芸術作品を岩に作り、目を愉しませてくれた。こんな霧氷は、関西の高見山、三峰山では見ないものだった。



頂上への道・岩についた霧氷



頂上への道・岩についた霧氷



北八甲田・大岳頂上

頂上は、ガスが濃く視界は無いが、霧氷の芸術が沢山あり、この寒さと強風の中で15分も過ごしていた。寒さも忘れる美しさ、不思議さだった。

頂上から仙人岱方向へガスで幽玄さを漂わせた鏡池を経て、更に 5 分ほど下ると急にガスが消えて東西と南側が開け、視界が広がってくる。感動的な光景は、東側の高田大岳と小岳の霧氷に輝く姿で、南八甲田も霧氷を頂き遠望出来る場所だ。



奥・高田大岳、手前・小岳



仙人岱 酸ヶ湯

仙人岱  
酸ヶ湯温泉  
十和田湖温泉ホテル

14:10 14:15  
15:50 16:30  
17:15

大清水の水は格別の味だった。  
1、2号車合流して十和田温泉へ。



日程・場所・写真

着時刻

発時刻

記録・写真

2009・10・23(金)  
奥入瀬・十和田ウオーク

起床・出発準備

十和田湖温泉ホテル

5:00

5:30

希望者 5 名のみ 2 号車で出発。途中で、かもしかとの出会いもあって鳶の七沼へ。

鳶の七沼駐車場

5:50

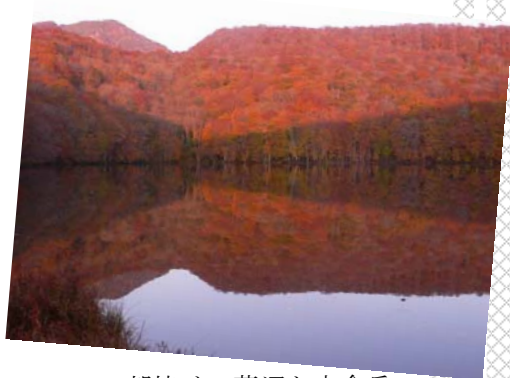
5:50

鳶沼

6:00

6:40

ウォーキング道で鳶沼と赤倉岳が、朝焼けに染まる場所です。しばらく眺めを楽しみ、写真を撮りまくった。



朝焼けの鳶沼と赤倉岳



奥入瀬・石ヶ戸付近

十和田湖温泉ホテル

7:00

7:30

朝食を済ませて出発。

奥入瀬・石ヶ戸駐車場

7:40

7:45

2号車は、節子さんを雲井の滝で下ろして銚子の滝駐車場に向い、そこから下流の石ヶ戸に向い歩く。1号車は、石ヶ戸駐車場から上流の銚子の滝に向かって歩く。節子さんは、雲井の滝から下流の石ヶ戸に向かう。阿修羅の流れ付近で篠島と出会う。



奥入瀬・阿修羅の流れ付近・朝の斜光



奥入瀬・玉簾付近

銚子滝駐車場

10:00

石ヶ戸駐車場で、1、2号車  
合流出発

11:00

十和田観光汽船乗り場

11:30

12:00

湖上遊覧に出発。紅葉の湖岸が目を楽しませてくれる。

乗り場

12:50

13:30

湖岸のレストランで、昼食後、発荷峠展望台へ出発する。



十和田湖遊覧



発荷峠・十和田湖展望台

日程・場所・写真

2009・10・23(金) 続き  
 鈴見の滝・銚子の滝

着時刻

発時刻

記録・写真

14:40

15:15

大湯川支流と思われるこの滝は、日経新聞でも紹介されており、付近には銚子の滝もある。いずれも今は紅葉で訪れる人は、我々以外にも少しはある。



銚子の滝



錦見の滝



大湯川の紅葉

山中さんは、予定通り 23 日の JAL の夜便で東京へ帰るので青森空港まで送り込んで別れる。大阪への便は、翌日便しか取れなかった為、他の 6 名は、青森市内で宿泊するので此处で山中さんとお別れた。独特のジョークで皆を笑わせてくれていた御仁だけに、別れが惜しまれた。

青森空港

16:50

16:55

ホテルに荷物を搬入。車を返却しに篠島、高水間がトヨタレンタに向かう。駅前が混雑して意外に時間がかかってしまったが、ホテル到着後は皆で十和田名物「ばら焼き」を予約先に食べに出た。青森で食べた十和田名物だが、ビールに良く合い、飲み物も進み、笑いが絶えなかった。

ルートイン青森駅前

17:30

2009.10.24(土)  
 青森から大阪へ

起床・食事・出発準備

6:00

6:45

バイキング朝食

ホテル

7:30

青森産の魚介類、果物、乾物などが安く、買い込んでいる

あうが(生鮮食品市場)

7:35

8:15

人も多い。ホテルに引き返して荷物整理のうえ、ホテル前の空港行きバスに乗り込んだ。

青森空港

9:15

10:00

JAL2152 便で帰阪(11:35)、伊丹空港で解散

## いまごろ 百名山

15 期 舟田 節子

「メダカ社会との共鳴現象」と、百名山指向を酷評したのは本多勝一氏。「『百の頂きに百の喜びあり』ではなく、深田氏も今なら『百の頂きに百の怒りあり』と書くのでは…」と荒廃を慷慨した加藤久晴氏。そんな著名人ではない私もかつては、百名山ブームに対して、単純に批判派だった。

それが今はかなり填まっている。填まった立場で分析してみる。まず批判というものは、対象以上にその人格やステータスがものを言う。つまり、一般大衆を愚かと思っただけの傲慢な視点、同等に立とうとする者への冷やかな牽制。同等であればやっかみ、嫉みも混じる。人間はその程度のものだ。大概はシロでもクロでもどっちでもいい類なのである。

しかし、対象が「山」となると、ちょっと話は違うんじゃないかと思う。批判する側、慷慨する側にもっと偽善や私物化といった厭らしさを感じてしまう。

自然はもともと平等で、毅然として寡黙である。人類以前からあって、この頃は「里山」がブームであるにしても全てをヒトが作り上げたわけではない。オバ・ユ・スや温暖化、屎尿処理問題やら、それらは警鐘し、対策を講じていかねばならないであろう。爪に泥して動く立場もあれば、声高にスポ・クスマンの立場で動く人もいるであろう。そう心得たにしても、「山」は結構「お山の大将」になりたがる人が多いように思う。山の動物達は縄張りをもって生きているから、「山が好き」には縄張り根性が絡みがちなものかもしれない。それで正義漢面をされたら、「もう結構！」の気分させられる。

どちらにせよ、つい近年まで、女性は「山遊び」が出来なかった。今も残る「女人禁制の山」・・・その件には深入りしないにしても、いわゆる生産性のない遊びからは遠い存在だった。そうであったのに、私が愛用している某観光会社ツアーの参加者は8割方を中高年女性が占める。今、百名山の山中で出会うツアーも、小グループも、そんなところである。

そんな中に混じってみるまで、私も高み風情にいて...いわゆる中高年女性達の3K「綺麗」「軽量」「感動」を馬鹿にし、化粧品やサプリメントの方が多いザックの中身を冷笑してきた。ガイド任せで、おしゃべりばかりで、「楽しかったね」で終わる登山を軽薄と見做してきた。そして、この夏のトムラウシ遭難は、そのようにエスカレートしていく「お任せ登山」に、きつい警鐘となるものだった。しかし、いざとなれば単独行ができるほどの技術と体力をもち、天気図と地図が読め、現地情報に精通しなければ、山を味わう資格はない...と切り捨てていいものだろうか。そうであれば、今も、ほとんどの女性に入山資格はない。何事も被害者側に立たねば、隠れた差別には気付かない。本来自然との関わりに、資格云々、上下云々がいえるだろうか。短時間で登ろうと、のろのろやっと頂きに達しようと、感激は一緒である。一緒というより、それが困難かと思っていた人の方が、喜びはむしろ大きいようでもある。

自然は与え過ぎるほどに与えてくれる。水も空気も、全てを地球は惜しみなく与え、困り込んではいない。それらを味わうために、グループを作り、精通したガイドを雇い、一般道といえる山道を歩く。快適な山小屋に泊り、衣類を乾かし休養できれば、縦走も可能である。「継続は力

なり」の通り、最初は覚束ない足取りだった人が、中級といえる山もこなせるようになった。山岳会なるものに彼女は入会する度胸はないであろうし、昔なら山とご縁ができるはずはなかった。ツアー客の立場で、多少はお客本位にしてくれるだろうとの判断があったから、山歩きとご縁が出来、「人生一番の楽しみ」を獲得できたのだ。

ちなみに私の場合、父のお供でのファミリー登山に始まり、金大ワンゲル、社会人山岳会と、極めて正道というか、山の王道を歩いてきた。それゆえに、ごく普通の人の山遊びの気楽さが、かえって理解不能だった所もある。中高年登山ブームが地方に伝播してきた時には、ガイドブックを執筆する側になった。それは胸を張れることでもあったけれど、地方の山に貼り付いていなければならぬことでもあった。年間50日の入山数を維持していても、いっこうに山数は増えていかず、百名山もいつまでも蚊帳の外だった。専門家とは、「狭く、深く」をいうのであろうし、そのように特化されてこそ、エキスパートとして声が掛かり報酬も得られる。でも私は指名されるわけでもない只の下請けだ。準山浸りのような生活をしながら、どこか不完全燃焼の思いは消えなかった。

丁度そんな頃に山岳会での騒動は起き、また、百名山指向のツアーが地元観光業者から出るようになっていた。それは某社のドル箱シリーズになった。最初は百名山も・・・程度であったのが、客に押されるかのように、最近、山岳会顔負けの縦走をこなすようになってきた。主催者側の見える苦勞に、見えない苦勞があるにしても、それほど渴望していた層があり、需要があったということである。

私自身、久住山のツアーが初めて出た時の驚きを忘れられない。自分の山の辞書にその山名は全くなかったのだ。金沢駅の西口に行けば、九州の久住山の登り口につながっていく...というのは、まさに夢話だった。それまでは手段が全くないから百名山という指向をもたなかったのだし、そんな立場のままの百名山批判は、全国を飛び回るといって贅沢がやれる別格の人達への嫉妬も混じっていたと思う。「もともとバス会社ですから、遠方の方が仕事になりますんで...」と、百名山ツアーは九州、北海道、東北の山々から企画されていった。個人で行くより安く、縦走した先にバスが待っていてさらに山梯子が出来るという有り難さ。それまで北陸の日帰り圏と、北アルプス程度しか知らない自分にとって、それらの山々は本当に新鮮で、輝いて見えた。「初めて！嬉しい！」で申し込んでいるうち、百名山は70を越えていた。山が逃げないと言われているのは若いうちで、いつ終了ゴングが鳴るかは誰にも分からない。たかが百名山、されど百名山。深田百名山を一通り登って、そのうえで再登したり、自分の山好みを決めていってもいいな、という風に思い始めた。

ヒマラヤやカラコルム...それら世界ランクの山は、それはそれで美しい。しかし、水と四季に恵まれた日本の山も、またとびきりに繊細で精巧で美しい。荷物を現地人に背負わせての大名山行も、それはそれなりにそうしなくては行けないのだから、仕方ないけれど、自己責任分を当然に背負い、ひそかなおまけ分を分かち合って食べる日本の山は、苦勞も達成感も共有できて楽しい。再会、再再会しての山話がまた楽しい。そうやってお馴染みになった女性達と懇意になって話

してみると、仕事や家庭をしっかりとこなしたうえで、山遊びに来ている人達ばかりだ。ずっと日本を底支えしてきて、全てのクッション役になって、それでも前向きに孫の世話や姑の世話の合間を縫って山を楽しみに来ている。

「山は自己責任の世界で、それが出来る者だけが山に来る資格がある」とするのは、しいて言えば男の世界。その留守を支える女性がいてこそその豪語でもあろう。

今やっと、時を得て、日常の隙間に山遊びに出てくる女性達は、それはそれで健気で可愛い。自己責任の部分をお金で買い、ストレスを発散して、また日常へ戻っていく。前者が高尚で、後者が低俗などとは言い捨てられない。

綺麗な日本の山があってよかったね。百名山まであと幾つとか、70歳を越えても槍ヶ岳へとか、3000m峰を全部とか、いい目標をもててよかったね。山を名声の材料や、他人を見下す材料にしてしまう人達より、あなた達の方がもっと山に敬虔で、よほど感謝に溢れていて、山を愛する人達だと言っていいよね…。この素晴らしい景色は、真面目に生きてきたことへの、何よりのご褒美だよ。

安全を、節約したお金で買う…それも十分な自己責任だと思う。身の程をわきまえた判断だといえる。そのために感動が安っぽくなることはない。ずっと山団体に所属してきた私には、所属が山への手段であり、安全でもあった。その替わりノルマ漬けにもなり会風にも染まり、憧れや感動は隅っこに押し込められた。誰の山をやっているのかわからなくなっていた。私にしてもお金で行きたい山が選べるのは、不思議な自由…。需要と供給という経済論理にのってのことだが、金沢という土地で、山を続けてきた私が、

かつて手にできなかった自由である。今頃そんなことに気付いている。

この夏はついに、東京発の幌尻岳ツアーにも乗った。送られてきた年間カタログを見て、あまりの機会格差に愕然とした。深夜バスに乗って出ていきさえすれば「遮断されていた可能性」に手が届くという事実。まだ夫への遠慮があるにしても、この歳にして夢いっぱい。ホップ、ステップ、あとはジャンプあるのみ！

さて、「深田百名山」は日本の山のゆるぎない基準である。「されど深田百名山」ならツアー - 数も多いし、個人でめざすにしてもアクセスがよく、情報量も多い。写真集も豊富なら、共通話題にもしやすくと、後々も楽しめる。季節を変えたり、面へと広げたり of 自由度も大きい。他の山から見つけても、登った山であるなら、もっと嬉しい筈だ。というわけで、逡巡した末に今頃、「まずは、百名山！」なのである。(現在 83 山達成)

(追記)

横浜在の息子の長男誕生を見に行くのにかこつけて、天城山・丹沢山を消化。85山に伸ばしました。「垂れ幕を準備しよう。友禅じゃなくて、スケッチ入りで」とかワイワイ。結構わがままをやった気分の私、仲間って有り難いと思います。

11月11日、山溪社から「分県ガイド石川県の山 改訂版」を受注しました。3月発行予定です。騒動がおきてから3年。登頂を諦めかけた山の、突然霧が晴れたような…。最終確認に忙しくなります。そのことが下請けの単なる意地には終わらないように、まだまだ気を引き締めての活動が続きます。40代が続けて入会しているのが嬉しい。理屈も何も、次世代に引き継いでいけてこそ、風は流れます。

## 23期同期会（2009年8月8日～9日）

犬山・木曾川ミステリーツアー（篝火の下、不揃いな鵜らを襲った悲喜劇の行方）

・9日（日）

9時 木曾川 日本ラインくだり

14時 昼食後、解散

幹事：浅輪郁代

面子：以下の15名

- ・関西組 石地、宮西（滋賀）  
興井（京都）
- ・広島組 鈴木（康）
- ・北陸組 小久保、竹内、村井（富山）  
戸水、中川、名倉（石川）  
宇野（福井）
- ・愛知組 浅輪（旧姓長田）、窪川、  
足立（旧姓児玉）、  
坪井（24期）

国宝 犬山城



23期 名倉 均  
今年6月、同期の浅輪さんから我家のパソコンにメールが舞い込んできました。『久しぶりに、この夏、犬山で同期会を開催します。皆さんふるって参加して下さいね！』とのお誘い。6月のとある夜更け、名古屋金山の酒場に集った宇野君・窪川君・浅輪さんの3名が、しこたま酒を飲み、酔った勢いで同期会の計画を練ったのが今回の事の発端でした。

大学卒業後、幹事持ち回りで計6回程、同期会を開催してきましたが、ここ数年間は、皆多忙なこともあって開催できておらず（というか...、次回の幹事役であったはずの富山組がサボりのために開催できず）今回、浅輪さんのお誘いメールを受けて、久しぶりに開催の運びとなりました。

日程：2009年8月8日（土）～9日（日）

場所：犬山（愛知県）

行程：

・8日（土）

13時 犬山駅に集合

犬山城界限を散

16時 旅館着、風呂&食事

18時 旅館手配の船で鵜飼見物

20時 部屋に戻って宴会

鵜の軍団



学生時代の面影を残した面々（14名）と、撮影者の竹内君



## 集合までのエピソード

- ・富山組：3人で乗り合わせたものの誰もナビ・ETCを装備した車を持っていないため、せっかくの土日にも関わらず、正規料金でやってきたとのこと。
- ・石川組：ETCは装備されていたもののナビも地図もなく、大垣インターを降りてから反対方向に走って、30分はロスしたとのこと。
- ・滋賀組：電車で来たものの、話に夢中になって岐阜市で乗り換え損ねてしまい、結果、行き過ぎて戻ったため、ぎりぎり到着。

50歳にもなると、大学時代に比べやや体型が変わっていた人もいましたし、どこからともなく、「尿酸値」「血圧降下剤」「結石」「糖尿」「脂肪肝」などの言葉も聞かれましたが、皆、気持ちだけは約30年も前の大学時代にタイムスリップして、話題は尽きることなく、とてもとても楽しい時間を過ごす事ができました。

それと、宴会中に、たまたま山口克己さん(21期)から「メールアドレス変更をしました」とのメールがメンバーに届き、山口さんに写メールを送ったり、電話で話したりして、懐かしさも倍増しました。

幹事役を務めてくれた浅輪さんには、大変感謝しております。

今回の同期会で、このタイムスリップとともに、2件忘れられない出来事がありました。それらもこの場を借りて、お知らせしておきます。

### その1：水難事件

1日目、鵜飼見物の後、皆で部屋に集まって2次会を行いました。かれこれ

2時間程過ぎた時、部屋の奥にある洗面所の床が水浸しになっていることに気づきました。洗面所で水を出しながらブドウを冷やしていたのですが、洗面器の排水口がつまっていた、結果、水が溢れ出し床を水浸しにしたようです。

しかも、我々の部屋だけではなく、下の階まで水は伝わり、押入れの中も敷いていた布団も水浸しとなってしまったため、階下の客がフロントに訴え、その方々には急ぎ別室を手配したとの事。

浅輪さん(=日本の教育界をリードする犬山小学校に在籍、今回の旅館は校区)や、積水ハウスに勤務する宮西君(=ソフトバンク犬にそっくりな愛犬ロンの飼い主、建築のプロ)そして、弁護士の坪井君(=名古屋弁が標準語と信じている生粋の名古屋人、交渉のプロ)が、旅館側と話し合ってくれましたが、その日のうちには解決できず、改修費の支払いなどについては、後日、旅館側と浅輪さんとの間で折衝を続けるという話になりました。

宮西君の試算では、「改修工事で多分30~50万円必要で、改修が終わるまでは部屋が使えないため機会損失相当分も必要かもしれない」との事でした。

この夜は、不況の折、多額の弁償金を要求されたらどうしようかと、皆、内心びくびくしながらも、『いざとなれば坪井先生が何とかしてくれるでしょう!』と強がりつつも、不安を打ち消すため、しこたま酒を飲み、酔いつぶれ眠りに落ちました。

### その2：盗難事件

2日目、食堂での朝食を終えて旅館を出発する前に、浅輪さんが皆の部屋をまわって今回の会費を徴収していた時のこと、3名の財布から現金がなくなっていることに気づきました。集団で盗難にあ

ったようで...

3名とも1万円札だけが盗まれており、被害額は、合計で、なんと「25万円！」。

皆で部屋を留守にしたのは、宴会場での夕食の時か、鵜飼に行った時、もしくは食堂での朝食の時であり、どこかの時間に盗難にあったようです。

本来的には、貴重品は部屋の金庫に入れておくか、携帯すべきでしたが、久しぶりに学生時代の気分で、かつ、ゆるりとした犬山の趣に皆一様に気が緩んでしまっ、慎重さに欠落していました。一応、常時、部屋の鍵はかけてはいたのですが...

幹事の浅輪さんと被害者3名、そして弁護士の坪井君とで、旅館に掛け合いましたが、その場では解決ができず、これも水難事件と同じく、後日、旅館側と折衝との話になりました。

また、事件扱いとなるため、警察官が旅館にきて、小1時間、被害者3名は事情聴取を受けました。その際、印鑑は持参していないために、やむなく被害調書には母印を押すはめとなって、被害者であるにも関わらず、3名とも警察に指紋を採取されました。

指紋採取された被害者3名のプロフィールは、以下のとおりです。写真を見て誰か当てて下さい。

被害者A：

はるか昔、同期連中に結婚を祝ってもらって以来、約20年ぶりで同期会に顔を出したために「何やら不吉な事が起こるのでは？」、「天変地異の前兆では？」と、いぶかしがられた。公務員を退職し、日に数名の人間と会い話を聴いて日銭を稼ぐいがわしい商売に転職するも、瀬戸内海の小島に別荘があり、優雅な日々を過ごしているらしい。

今回、警察の事情聴取では、その怪しい容姿から日本国籍を疑われた節もある

ようだ。

被害者B：

被害金額が15万円と最も多かったため、「なぜ、そんな多額の現金を持って来たのか？」、「帰りにGへ足を伸ばして豪遊する予定だったのでは？」などと、皆から不審がられたが...。もしかして、持参した15万円はヘソクリの全てだったのかもしれない。留守の間、嫁さんに見つからないようにするために。博士の学位を持ち、休日は今でも登山やマラソン出場などで、いまだに健脚を誇っているようだ。

被害者C：

健康上の不安を抱えながらも、地元有力者のおごりでキャバクラに通っている。反体制思想の持ち主故、管理職への昇進はあきらめているが、宴会中もケータイへの電話が絶えず、度々中座する姿が目撃されており、仕事はかなり多忙な様子。単に「地元有力者を引き連れて来てえ～」と、キャバ嬢から来店の催促だったのかもしれないが。





以下は、事後の顛末です。

幸いに、旅館側が入っている盗難保険で40%（合計で10万円）は補償される事となりました。

ちなみに、もし金庫に入れていれば（上限額はあるとは思いますが）100%補償されたとの事。残15万円は、今回の参加人数がちょうど15名だったので、皆の総意で「均等に一人1万円」を義援・負担する事に決め、一件落着としました。

実は、坪井弁護士から「40%で満足せず、50%要求してみては？」というアドバイスが届き、被害者3名のうち1名が果敢に挑みました。東京海上火災（旅館が加入していた保険会社）にまで電話をして、しぶとく交渉したとのことですが、結局、40%で納得したそうです。この交渉人が誰だったかは皆さんのご想像にお任せします。

部屋水浸し改修の方も、旅館側が加入している損害保険が適用されたとのことで費用請求はきませんでした。もしかして、盗難事件と坪井弁護士の名刺効果のために、『請求できないなあー』との旅館側のご配慮があったのかも。

2020年に開催予定の同期会（幹事役は愛知組）では、またこの旅館を使うかもしれないです。諸々の出来事を笑い話にして反芻するために...

今後の同期会と幹事役は、以下のとおりです。

今後とも、皆元気に参加できればと願っています。今回参加できなかった同期の人や前後する期の方も、もし、ご都合があれば、是非ともご参加下さい。

皆さんにお会いできる日、楽しみにしています。

- |       |               |
|-------|---------------|
| 2017年 | 富山組           |
| 2017年 | 関西組 + 広島組     |
| 2017年 | 北陸組           |
| 2020年 | 愛知組（皆、60歳の節目） |

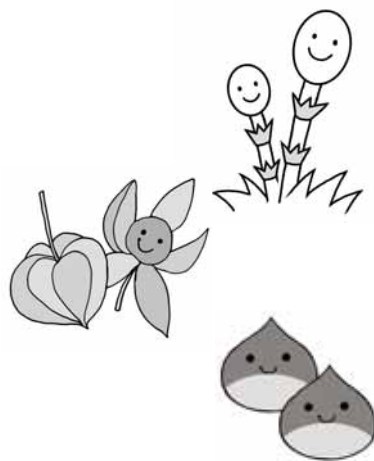


## 【現役のページ】

現役主将3回生の山形和弥です。2009年度(2009.4~2010.3)の現役の活動について報告します。

### 2009年度活動報告(予定)

4月：花見、新歓ハイク(キゴ山)  
5月：新トレ(医王山)  
6月：結団式、トレーニング山行  
7月：トレーニング山行、富士山PW  
8月：夏合宿(北アルプス、後立山)、ピアガーデン  
9月：夏合宿(南アルプス)、穂高PW  
10月：槍穂PW  
12月：忘年会、冬合宿(蓼科山)  
1月~2月：雪訓  
3月：春山PW(笈ヶ岳)、追いコン



### 夏合宿について

#### < 北アルプス party >

##### ・トレーニング山行

第1回：倉ヶ岳~奥獅子吼山 第2回：別当出合~白山(御前峰)

##### ・夏合宿(8/22~8/29)

1日目：金沢 折立

2日目：折立 薬師峠 薬師岳W 薬師峠

3日目：薬師峠 黒部五郎岳 黒部五郎小屋

4日目：黒部五郎小屋 三俣蓮華小屋

5日目：三俣蓮華小屋 黒部源流ルートW ワリモ北分岐W

黒岳(水晶岳)W 鷲羽岳W 三俣蓮華小屋

6日目：三俣蓮華小屋 双六岳 千丈沢乗越 槍ヶ岳山荘

7日目：槍ヶ岳山荘 槍ヶ岳W ヒュッテ西岳 大天荘

8日目：大天荘 常念岳 ヒエ平登山口 金沢

#### < 後立山 party >

##### ・トレーニング山行

第1回：別当出合~白山(御前峰) 第2回：南竜~白山(別山)

##### ・夏合宿(8/30~9/8)

1日目：金沢 猿倉 白馬尻小屋

2日目：白馬尻小屋 白馬岳頂上宿舎 白馬岳W 白馬岳頂上宿舎

3日目：白馬岳頂上宿舎 杓子岳 鑓ヶ岳 天狗山荘

- 4日目：（沈殿）  
 5日目：天狗山荘 唐松岳 唐松岳頂上山荘  
 6日目：唐松岳頂上山荘 五竜山荘 五竜岳W 五竜山荘  
 7日目：五竜山荘 キレット小屋  
 8日目：キレット小屋 鹿島槍ヶ岳 爺ヶ岳 種池山荘  
 9日目：種池山荘 新越山荘 針ノ木岳 針ノ木小屋  
 10日目：針ノ木小屋 蓮華岳W 扇沢 金沢

< 南アルプス party >

・トレーニング山行

第1回：倉ヶ岳～奥獅子吼山 第2回：勝原スキー場～荒島岳

第3回：別当出合～白山（御前峰）

・夏合宿（9/9～9/22）

- 1日目：金沢 易老渡登山口  
 2日目：易老渡登山口 易老岳 光岳小屋  
 3日目：光岳小屋 光岳W 光岳小屋 茶臼小屋  
 4日目：茶臼小屋 聖平小屋  
 5日目：聖平小屋 聖岳 兎岳 百間洞  
 6日目：百間洞 赤石岳 荒川小屋  
 7日目：荒川小屋 中岳避難小屋 荒川悪沢岳W 中岳避難小屋 高山裏避難小屋  
 8日目：高山裏避難小屋 三伏峠  
 9日目：三伏峠 塩見岳 熊ノ平小屋  
 10日目：熊ノ平小屋 間ノ岳 北岳 両俣小屋  
 11日目：両俣小屋 野呂川出合 北沢駒仙小屋  
 12日目：北沢駒仙小屋 甲斐駒ヶ岳W  
 13日目：北沢駒仙小屋 仙丈ヶ岳W 金沢

現役部員数（2009.10現在）

	男子	女子	計
4回生	7	3	10
3回生	6	0	6
2回生	5	6	11
1回生	3	4	7
計	21	13	34

# KUWVOB会 会計報告

(2008年9月1日~2009年11月30日)

## 【 収 入 の 部 】

OB会費納入	1,756,000
寄付	32,000
預金利息	1,137
計	1,789,137

## 【 支 出 の 部 】

OB会報(やまざと)No.23 作成費	194,250
OB会報(やまざと)No.23 郵送費	35,586
OB会報(やまざと)No.23 発送作業費	9,582
春の小屋酒場食費	28,861
春の小屋酒場備品費	39,746
春の小屋酒場諸雑費	22,480
現役とOB会役員との懇親会	46,600
50周年記念総会懇親会への補助	152,353
事務備品費	9,049
役員会議費	800
振込手数料	2,835
計	542,142

## 【 差 引 剰 余 金 】

前回(08.8.31)繰越金	739,947
収 入 の 部	1,789,137
支 出 の 部	542,142
差 引 剰 余 金	1,986,942

## 事務局から～

OB会会報「やまざと」vol.24 も原稿を送っていただいた方々のご協力のもと、何とか年末発行にこぎつけることが出来ました。特に、こちらから原稿のお願いをした方々には、突然のお願いにもかかわらず快く引き受けていただき、本当にありがとうございました。

さて、織り込みでご案内したとおり、昨年の50周年記念懇親会の場で紹介しましたワングルOB会の愛唱歌「森のうた」のCDが、もうすぐ完成するところまで来ました（発送は来春の予定）。地元バンドグループ「でえげっさぁ」の全面協力のもと、先日レコーディングをしたのですが、何とOB会役員の面々もバックコーラスとして参加したのです。伴奏やボーカル、コーラスを順番に重ねていき、徐々に出来上がっていく過程は素人からみるとすごいもので、生まれてはじめてのレコーディングは感動的な体験でした。いい出来栄えになっていますので、皆さんもぜひ完成版を聞いて「森のうた」を歌ってもらえればありがたいです。

金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会 会報誌「やまざと」vol.24

発行日 2009年12月

発行者 久富 象二（OB会会長・20期）E-mail chmxm643@ybb.ne.jp

編集・印刷 デザイン・プリーズ

OB会事務局 〒920-0831 金沢市東山3-19-4 鳥越 伸博（23期）

TEL(076)252-6953 E-mail tori3512@knz.fitweb.or.jp

OB会ホームページ：<http://www.kuwv.net> 管理人/奥名 正啓（15期）

OB会費払込口座（口座名義：金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会）

郵便局（通常払込）00780-3-14120

ゆうちょ銀行〇七九支店 当座預金 No.0014120

北國銀行本店 普通預金 No.223703

- ・ OB会は皆様のOB会費で運営しております。OB会の趣旨にご賛同いただける方で、会費納入をお忘れの方は、何卒ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。（前回のやまざと vol.23 に払込用紙を同封してあります。また、払込をされたかご不明の方は 事務局鳥越までお問合せください。）
- ・ 住所が変わられた方は お手数でも事務局までお知らせいただくと幸いです。
- ・ 奥名さんから定期的にeメールでOB会通信を配信していただいております。配信をご希望される方は ご自分のメールアドレスを奥名さんまでお知らせください。
- ・ 奥名さんのメールアドレスは [ma-okuna@nature.email.ne.jp](mailto:ma-okuna@nature.email.ne.jp) です。